

トヨタ財団  
広報誌[ジョイント]  
November 2013

J O I N T

【臨時号】豊田英二名誉会長追悼  
今、その志から学ぶ





常に学ぶ心  
豊田英二

目次 豊田英二名誉会長追悼「今、その志から学ぶ」

- 理念を引き継ぎ、次の時代を拓く活動を……3
- トヨタ財団設立趣意書にこめられた思い……4
- トヨタを世界的企業に育て、財団の礎を築いた「決断」の人……6
- 豊田英二氏の発言「抜粋」……8

## 理念を引き継ぎ、 次の時代を拓く活動を

公益財団法人トヨタ財団会長 奥田 碩

豊田英二氏は、1974年のトヨタ財団設立から1998年までの24年間の永きにわたり、トヨタ財団の理事長・会長を務められ、現在は名誉会長をされていました。

豊田名誉会長は、「トヨタ自動車企業が企業として大きくなれたのは、社会環境の恩恵によるものであり、その恩恵に対して報いることが何よりも重要である」、「社会への恩返しなのだから、その結果として見返りを求めるのは理屈に合わない、企業益のためではなく社会のために活動せよ」と繰り返し語っておられました。そのお考えに基づいてトヨタ自動車の企業活動とは独立した助成財団を設立し、その運営を初代専務理事となった故林雄二郎氏（元東京工業大学社会工学科教授）にすべてお任せになりました。このお二人が築かれた路線が、現在までのトヨタ財団の基本的な理念となっております。

トヨタ財団が設立された時代から現在まで、私たちをとりまく社会は大きく変化してきました。急激な変化による歪みも顕在化しつつあるなかで、2011年に東日本大震災が発生し、社会のあり方そのものに対して疑問を投げかける機運が高まりました（2年半が経過した今、そういった機運も低下しつつあるように感じられるのは残念に思います）。

思い起こせばトヨタ財団が設立された1970年代も高度経済成長がピークを迎え、経済成長一辺倒のあり方に疑問の声があがった時代です。

そうした時代の潮目が変わる時にこそ、トヨタ財団のような民間財団の役割が大きくなるように感じます。豊田名誉会長も「企業でもなく、政府でもなく、民間財団だからこそできることをすべき」、そして「常に学ぶ心が大切」ということを幾度となく語っておられました。

トヨタ財団は来年40周年を迎えますが、私は会長として、豊田名誉会長が設立の時に掲げた理念を今後も引き継いでいかねばならないと考えています。

豊田名誉会長がお亡くなりになられた今、改めてその志や姿勢から学び、守るべき理念を大切にしつつ新しいことに挑戦し、次の時代を拓く活動をしていきたいと決意を新たにしております。

# 人間のより一層の幸せを目指す トヨタ財団設立趣意書にこめられた思い

トヨタ財団は来年（2014年）の10月に設立40周年を迎えます。そのスタートにあたって財団の礎となる「理念」の構築および活動のあり方に関して、豊田英二氏は真摯な姿勢で取り組み、さまざまな関係者と真剣に議論を重ね、考え、その方向性を示唆したことはいうまでもありません。その尽力の成果のひとつとして結実したのが左の「設立趣意書」であり、ここには豊田英二氏の考えや人柄が圧縮され表現されているといえます。

これは当時、トヨタ自動車工業株式会社取締役社長として、トヨタ自動車販売株式会社取締役社長の神谷正太郎氏との連名によって起草されたものです。これを期に豊田英二氏はトヨタ財団初代理事長に就任しますが、後年、企業の社会貢献活動について、次のように述べています。

企業内での社会貢献活動が組織的におこなわれるようになってみると、財団活動をどのように位置づけるかが課題になってきた。その時、私は「企業の社会貢献活動はかなりの幅をもつたものになる。そのなかで、企業としては、アメリカの企業財団のような財団への支援もあるだろうが、トヨタ財団のような『自主性のある助成財団に対する支援』もある」というように、考えればよいのではないかと思った。（会長退任にあたって思うこと）、『1997年度年次報告書』より）

そしてまた、次ページのような直筆のメモ（図参照）を示して、こ

う説明しています。

財団はそれぞれ個人・企業の歴史を負って設立されたのであり、その設立理由は多様である。…企業のフィランソピー活動は、幅広く考えられるのではないかと。たとえば、一番上の企業財団は、企業と密接な関係を持ちながら、企業になんらかの関係のある分野への助成をする財団である。一番下にあるのは、それと対照的に企業と関係のない分野で助成活動をおこなう財団である「トヨタ財団を想定する」。その間の領域に地域社会への支援や全国ベースでの社会活動への支援、学術研究諸機関への支援、さまざまな啓蒙活動などがあるのではないかと。（財）助成財団センターに期待すること、『FC Views』21号、1998年8月）

設立から40年、来たるべき時代に向けて、今私たちトヨタ財団は豊田英二氏の遺志をどのように生かし継いでいくか、「初心」を忘れることなく、つねに前向きに、そして着実にこれからの歩みを進めていくことを問われているのだと考えます。



1973年トヨタ財団設立発表時の記事（トヨタ新聞）

## 設立趣意書

発明によって人類の幸福に寄与するという豊田佐吉翁の創始者精神は、その子喜一郎に自動車という形で受け継がれ、今日のトヨタへと発展してまいりました。

トヨタは「自動車をとおして豊かな社会づくり」を行うことを基本理念として、社会の恩恵のもとに社業に努めるとともに、環境整備、交通安全に関する教育の推進、文化施設の寄贈など幅広く社会協力にも努めてまいりました。

このような基本姿勢に立って、このたび自動車をはじめましてから40年を機に、人間のより一層の幸せを目指し、将来の福祉社会の発展に資することを期して、財団法人トヨタ財団の設立を決意いたしました。

この財団は、世界的視野に立ち、しかも長期的かつ幅広く社会活動に寄与するため、生活・自然環境、社会福祉、教育文化等の多領域にわたって時代の要請に対応した課題をとりあげ、その研究ならびに事業に対して助成を行うものであります。

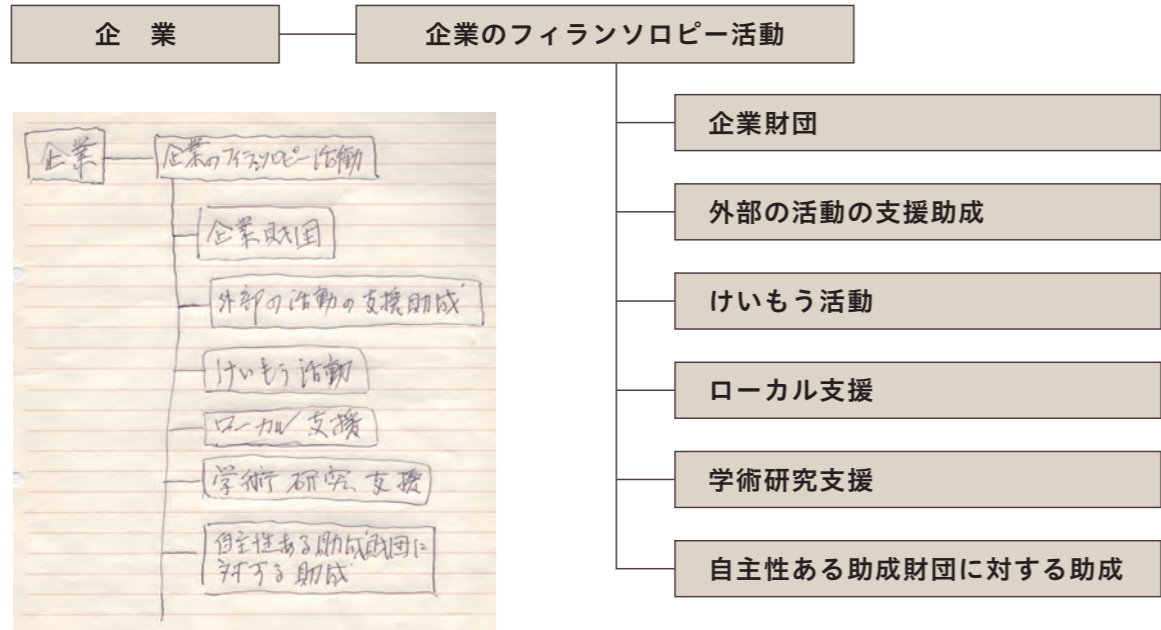
ここにトヨタ自動車工業株式会社及びトヨタ自動車販売株式会社の拠出資金により、この目的が遂行され、いささかなりとも社会的要請にお応えすることができれば、設立者の喜びとするところであります。

何卒、関係のご当局のご理解とご支援をお願いする次第であります。

昭和49年9月19日

設立者

トヨタ自動車工業株式会社 取締役社長 豊田 英二  
トヨタ自動車販売株式会社 取締役社長 神谷正太郎



豊田英二氏直筆メモ（1992年6月）

# 一世紀を駆け抜けた生涯 トヨタを世界的企業に育て、財団の礎を築いた「決断」の人

豊田英二氏は1913年9月12日に生まれ、2013年9月17日に心不全のため逝去されました。100歳になられたばかりでした。最後はトヨタ自動車の最高顧問であり、トヨタ財団の名誉会長として、企業のため社会のために尽くし多大な功績を残された一世紀といえるでしょう。その伝記的足跡は『決断 私履歴書豊田英二（日本経済新聞社）などに記されていますが、ここでは在りし日の豊田英二氏を偲び、白寿を記念して作られたフォトアルバム「（はじめ）START & ORIGIN」（トヨタ自動車株式会社）の写真数点と、財団に残された数少ない貴重な写真のいくつかをご紹介します。



① 小学校へ入学した大正9年（6歳）頃。左は戦死した弟の俊彦氏。② 第八高等学校の友人と。③ 株式会社豊田自動織機製作所入社間もない頃。④ 壽子夫人と帝国ホテルにて。⑤ 昭和25年、喜一郎氏と家族に見送られフォード研修のためアメリカへ旅立つ。⑥ 昭和42年、トヨタ自動車工業株式会社社長就任当時。⑦ 平成5年、傘寿（80歳）祝いの会。⑧ トヨタ財団初年度（昭和50年）の贈呈式。⑨ 昭和52年トヨタ財団贈呈式懇親会。右は加藤誠之理事（トヨタ自動車販売株式会社社長）。⑩ トヨタ財団10周年記念シンポジウムにて、中央は林雄二郎専務理事。⑪ 『トヨタ財団十年史』発行に際して行われた、森秀太郎副理事長（左）と林雄二郎専務理事（右）との座談会。⑫ 昭和63年第48回理事会、第13回評議員会。森秀太郎副理事長（左）と浅田孝専務理事（右）。⑬ トヨタ財団20周年記念事業「海のシルクロードーチャンパ王国の遺跡と文化展」オープニング。⑭ 同展にて、右は飯島宗一理事長。

※ 役職はすべて当時

## 略歴

1913(大正2)年	9月12日、愛知県に生まれる
1933(昭和8)年	東京帝国大学工学部入学
1936(昭和11)年	豊田自動織機製作所入社
1937(昭和12)年	トヨタ自動車工業分離独立に伴い転籍
1960(昭和35)年	同社 取締役副社長に就任
1967(昭和42)年	同社 取締役社長に就任
1974(昭和49)年	トヨタ財団設立 初代理事長に就任
1982(昭和57)年	トヨタ自動車取締役会長に就任
1990(平成2)年	トヨタ財団会長・理事長制を導入、会長に就任
1994(平成6)年	トヨタ自動車名誉会長に就任
1998(平成10)年	トヨタ財団会長を退任
1999(平成11)年	トヨタ自動車最高顧問に就任
2013(平成25)年	9月17日、逝去(享年100歳)

## 栄誉

1971(昭和46)年	藍綬褒章受章
1983(昭和58)年	勲一等瑞宝章受章
1985(昭和60)年	ポルトガル共和国「エンリケ航海王子勲章」受章
1990(平成2)年	勲一等旭日大綬章受章
1990(平成2)年	タイ王国「二等白象勲章」受章
1991(平成3)年	ベルギー王国「王冠勲章 グランオフィシエ章」受章
1992(平成4)年	タイ王国「一等タイ王冠勲章」受章
1993(平成5)年	オーストラリア勲章(コンパニオン)受章
1993(平成5)年	FISITA(国際自動車技術会連合会)メダル受賞
1994(平成6)年	AUTOMOTIVE HALL OF FAME(自動車殿堂) AWARD 受賞
1995(平成7)年	ジェームズワット国際ゴールドメダル受賞
2001(平成13)年	タイ王国「一等ディレクグナポー勲章」受章

# 企業は企業らしく、財団は財団らしく 豊田英二氏の発言「抜粹」

初代理事長就任から会長退任までの24年間、豊田英二氏がトヨタ財団に残した発言は必ずしも饒舌なものではなく、また言葉巧みに人を誘導するようなものはありませんでした。しかし、そこには私たち助成活動に携わる者が指針としうる要点に関してのすぐれた見識と一貫性があります。それは物事の瑣事にとらわれず本質をつかみ、大切にすべき根本の精神をけっして忘れることのなかった人だったからこその特長であるといつてよいでしょう。以下、豊田英二氏の発言記録のなかから、今後も学び、活動に生かすべき言葉のいくつかを抜粹してご紹介します。



……企業がやるべきことは企業がやるとしても、社会に横たわる様々な問題については、その分野の学問、研究に待たねばならない、そのためには研究助成の財団が必要であろうと考えました。その後、内外の事情から多くのことを学び、交通安全、生活・自然環境、社会福祉、教育文化等の幅広い領域での研究や事業に助成する財団を発足することにしました。

こうした社会活動の実施について、なにも財団をつくらなくとも、企業自ら対応できるのではないか、という意見もあります。しかし、長期的に幅広く、しかも積極的な対応ということになると、企業内で企画し、実施していくということでは、どうしても限界がありその目的が果せなくなるおそれがあります。広く社会の役に立つことを考えた場合、企業の枠を越えた発想、行動が必要になってきます。

例えば、若い研究者への研究助成は、まだ海のものとも山のものとも分からないものへの助成と、いうことができるでしょう。また、その人材が育つかどうかは、おそらく10年経っても結果はでないでしょ

とはとうていなり得ないのです。単純に考えてみますと、お世話になったからお返しをするということですから、お返しをしたことでまた何らかのメリットを期待するということは大変不純ですし、理屈に合いません。仮にそのような考えで国際活動を行った場合、相手国社会にどのような印象を与えるか心配です。私どもは国際助成においてはあくまでも相手国の自主性を尊重し、そしてそれが相手国社会にとってどのような貢献をするかを考慮して助成すべきであると考えています。それは一企業という立場を超えた発想のもとに行うものであります。そしてこのような活動は、国でもなく企業でもなく、民間の助成財団であるからこそできるというふうと考えています。財団発足にあたり出捐企業としては財団の自主性を尊重すると決めています。それは企業の枠をこえ、社会のニーズにいいきと反応し、のびのびとした財団活動が必要であると考えたからです。

——10周年記念国際シンポジウム「開催にあたって」（トヨタ財団編『これからの民間助成財団』、東洋経済新聞社、1986年）より

昭和48（1973）年5月、英二は「トヨタ自動車に従事するものへ」と題する以下のメッセージを全従業員に発表した。

一、いかなる大企業といえども、社会の好意ある支援がなければ、発展はおろか、存立すらも危うくなる。トヨタ自動車が今日のように、日本有数の大企業に発展することができたのは、皆さんのためめぬ努力によるものであると同時に、社会環境の恩恵のためものであって、われわれはこのことを感謝し、片時といえども忘れてはならない。

二、今や、われわれはその行動によって、社会に大きな影響を及ぼすような大企業になっている。われわれの行動は、よきにつけ悪しきにつけ、社会の注目するところであり、それから逃れることはできない。このことをよくわきまえ、われわれの行動を通じて社会に責任をもたなければならない。

三、自動車が社会に果たしつつある役割、今後果たすであろう役割

う。このような気の長い話は、企業活動の範囲内ではなかなか推進しにくいところです。一方で、その研究資金が他から受けにくいほど、民間助成財団が支援するのにふさわしいものということもできます。もし、100%成功間違いないというような研究であれば、他から助成を得るチャンスは十分にあるはずなのです。

——1987年発行の財団パンフレットより

よく人は、（トヨタ財団が）東南アジアに助成しているのはトヨタの販売戦略に貢献するという言い方をします。しかし、財団が助成活動を行う場合、そのような発想にたつてできるものでしょうか。社会の恩恵にあずかったので、お世話になった社会へ何らかの貢献をしたという考えからできたわけですから、企業の販売戦略云々というこ

を十分認識し、その自動車をつくって社会に提供するわれわれの仕事に誇りと自信を持つと共に、社会の要望に適合したものが提供できるような最善の努力を払わなければならない。

四、今や、社会環境は変わりつつある。われわれは謙虚にこれを受けとめ、十分これに対応できる体質を備えた企業であり、また、企業に携わる者であらねばならない。

この中で「社会環境の恩恵に対する感謝」がうたわれ、しかもそのことを「片時も忘れてはならない」と明言している点に、英二の胸の内に脈々と流れ続けてきた想いを見ることができるといえる。

——『トヨタ財団十年史』（1985年発行）より

林雄二郎（トヨタ財団専務理事、当時）……非常に生意気なことですが、それは私は理事長にこのトヨタ財団が世界的に評価されて、トヨタは立派な財団をつくった、さすがにトヨタだと世界的に評価されることだけを目標にしたいと思えますと言ったのです。そのとき理事長がぜひそういう方向でやってくださいと言われましたことを、今でも覚えております。

豊田英二 やるべきことがはっきりしていたわけではないけれども、夢は大きく持つべきだということでしょうね。

〈中略〉

問題は余り定着してしまつたら、活性化の逆になって硬直化になつちやうから、それも本当は困るんだけど、ある程度の定着は、財団がこれからの仕事を安定的にやっていくうえにおいては必要なことだろうと思います。

しかし、同時にいったん定着したと思うものを、ある時間の経過の後に反省して見直しをする必要は絶対にあると思います。それが無いといよいよ硬直化していつてしまふだろうと思うからです。

……（我々トヨタ財団は）要するに海のものとも山のものともわからないものを対象にしてみました。そういう意味ではベンチャー・ビ

ビジネスにも似ているけれど、違う点は、ベンチャー・ビジネスはその企業の利益を追求するが、研究（に対する助成活動）は、社会全体の利益に貢献するという点で違う。

〈中略〉

日本人に財団というものを知ってもらう意味から、ある程度PRも必要でしょうね。それである程度の人に見る目をつくってもらう。だけれどもかかれもということでもなくいいけれど、ある程度のレベルの人には、日本に財団がたくさんあっているいろいろなことをやっているけれども、それぞれの特質はこうなっていますということをきちんと知らせてゆく。財団活動をやる以上そういう使命があるのではないかと……。

〈中略〉

森秀太郎（トヨタ財団副理事長、当時）……我々としては、多少手間はまかしても助成活動の内容を充実させた方が社会に対するよい影響を……。

豊田英二……それはもう手間ひまかけずにやったならば、カネをばらまくのと同じようなものだ。それではつまらんですよ。

〈中略〉

企業にはピックアップされないような領域をカバーしなきゃ財団の意味はないですから。

——「トヨタ財団の10年とこれから—座談会—」（『トヨタ財団十年史』1985年発行）より



私自身は、企業の責任者であったし、また、非営利組織である財団の責任者として、まったく活動の背景を異にする組織に身をおいたことになる。だから、それぞれが果たすべき分野の違いを十分に認識し、立場を明確にしながらかつめをはたしてきたつもりである。企業と財団の差を、感じとりながら行動することになっていた。そうでないと、それぞれの良さを生かすことは出来ない。往々にして、そのところを

混同しがちである。双方をよく理解するのは当然にしても、それぞれに越えられない一線がある。そのところを、混同してしまうと混乱がおこる。

財団活動が社会的によい活動だからといって企業が財団と同じようなことはできないし、逆に財団が企業と同じような考えで活動していたら財団としての信頼はかちえられない。

何事もそうであるが、はじめが大切である。今の世の中、そうしたはじめがっていないので、混乱してはいないか。企業は企業らしく、財団は財団らしく、それぞれにふさわしい活動をしなさいといけないと思う。

〈中略〉

できるだけ自由という方針であったので、そのなかからは、いろいろ面白い助成もあって、考えさせられることも多かった。トヨタ財団が多目的な活動ができる財団でなかったら、いまやっているような活動もできなかったろう。その点では、財団のつくり方はよかった。環境活動への助成などは、当然のことであるがいろいろ摩擦もあったように聞いている。しかし、世の中にはいろいろな考えの人がいることだし、そうした違いを認め合うということも大切である。「そうした摩擦を海外でひきおこすことは、財団として慎まねばならないが、国内での出来事なら、ひとつの政党のなかでだつて、いろんな考えがあることだから」と話したりしたことを覚えている。大切なことは、自由のびのびと意見が言えることだし、財団はそうした場を提供するということだ。

〈中略〉

いま、日本の社会は渾沌としている。そうしたなかで財団活動が真に社会の役に立っているのかどうかは、今一度よく見直す必要がある。長期的観点に立ち、視野をできるだけ広くもち、常にオルタナティブな考えを提案できるような力を、ぜひつけてほしい。

——「会長退任にあたって思うこと」より（豊田英二氏は1998年6月をもって会長を退任した）



JOINT「ジョイント」臨時号

【発行日】2013年11月28日 【発行人】伊藤博士 【編集】トヨタ財団広報グループ 【発行所】公益財団法人トヨタ財団 〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1新宿三井ビル37階 【TEL】03-3344-1701 【FAX】03-3342-6911 【URL】<http://www.toyotafound.or.jp/>



公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



UD  
FONT

